JID NEWS
社団法人 日本インテリアデザイナー協会月報
1996 3·4

「目　　次」

特集／日本の木の椅子展
● OZONEと「日本の木の椅子展」 ……1
● 「日本の木の椅子展」の足跡と今後 ……2
● 企画プロデュースを通して ……3
● 高山から名古屋へ、そして東京へ ……4
● 「ヒモイス」への回想 ……5
● 「会場レクチャー」の試み ……6
● セミナーに参加して
「日本の木の椅子100年 ― デザイン史に学ぶこと」 ‥7
「日本の木の椅子 いいデザインって何んだ？」 ‥8
● 「日本の木の椅子展」を見て ……9
● 「日本の木の椅子展」とミュージアム ……10
● IFI理事会アムステルダム会議報告 ……11
● 「IFInews」抜粋 '96年・1月号……12
● 1996年「JID賞」について ……12
● ファブリック壁装のお薦め……13
● 平成7年度・第5回理事会報告……13
● 役員辞退と次世代へのバトンタッチ……16
● 要　信一さん……16
● 森田良夫名誉会員を偲ぶ……17
● 桝谷博行会員を偲ぶ……17
● 関東事業支部の動き……18
● 中部事業支部の動き……18
● 大淵澄夫建築素描展……19
● 関西事業支部の動き……20
● 九州事業支部の動き……20
● 新入会員の紹介……21
● 会員の異動……22

OZONEと「日本の木の椅子展」

OZONE館長　若宮　直行

3月7日(木)～12日(火)の6日間、㈳日本インテリアデザイナー協会とリビングデザインセンターOZONEとの共催により、当館3階パークタワーホールにて「日本の木の椅子展」を開催しました。お陰様で会期中、約13,000人ものお客様にご来場頂き、特に10日(日)には、4,022人と記録的な人出となりました。

また、会場で連日開催した「会場レクチャー」は、毎回50人を超える会場参加者に対して、出品デザイナーの方々が椅子1点ごとの特徴や背景を解説され、大変好評であり、今後の展示会運営に大変参考となりました。

さて、今回の「日本の木の椅子展」ですが、私どもが本展を初めて拝見したのは、昨年10月の「IFI '95名古屋」の会場でした。来場者の多さと、実際に座れる椅子それぞれが放つ個性に、非常に大きな魅力を感じました。この後、JIDのご担当の方から、本展の東京巡回展を当OZONEでとのご提案があり、ふたつ返事でお受けした次第です。

最後になりましたが、貴協会並びに各会員の企画・運営・会場構成はもちろんのこと、協会を挙げての動員に対するご協力に深く感謝いたしますと共に、今後ともOZONEに対してのご支援を、よろしくお願い申しあげます。

パークタワーホールの会場入口、導入部中央に渡辺　力会員の「ヒモイス」を展示

日本の木の椅子展

1996年3月7日(木)ー12日(火) 10:30-18:30(金曜、土曜日は19:30まで) 入場無料
パークタワーホール[新宿パークタワー3F] 主催 リビングデザインセンターOZONE (社)日本インテリアデザイナー協会
後援 (社)日本インダストリアルデザイナー協会 (社)日本クラフトデザイン協会

「日本の木の椅子展」の足跡と今後

本部・展覧会委員会担当理事　山口　道夫

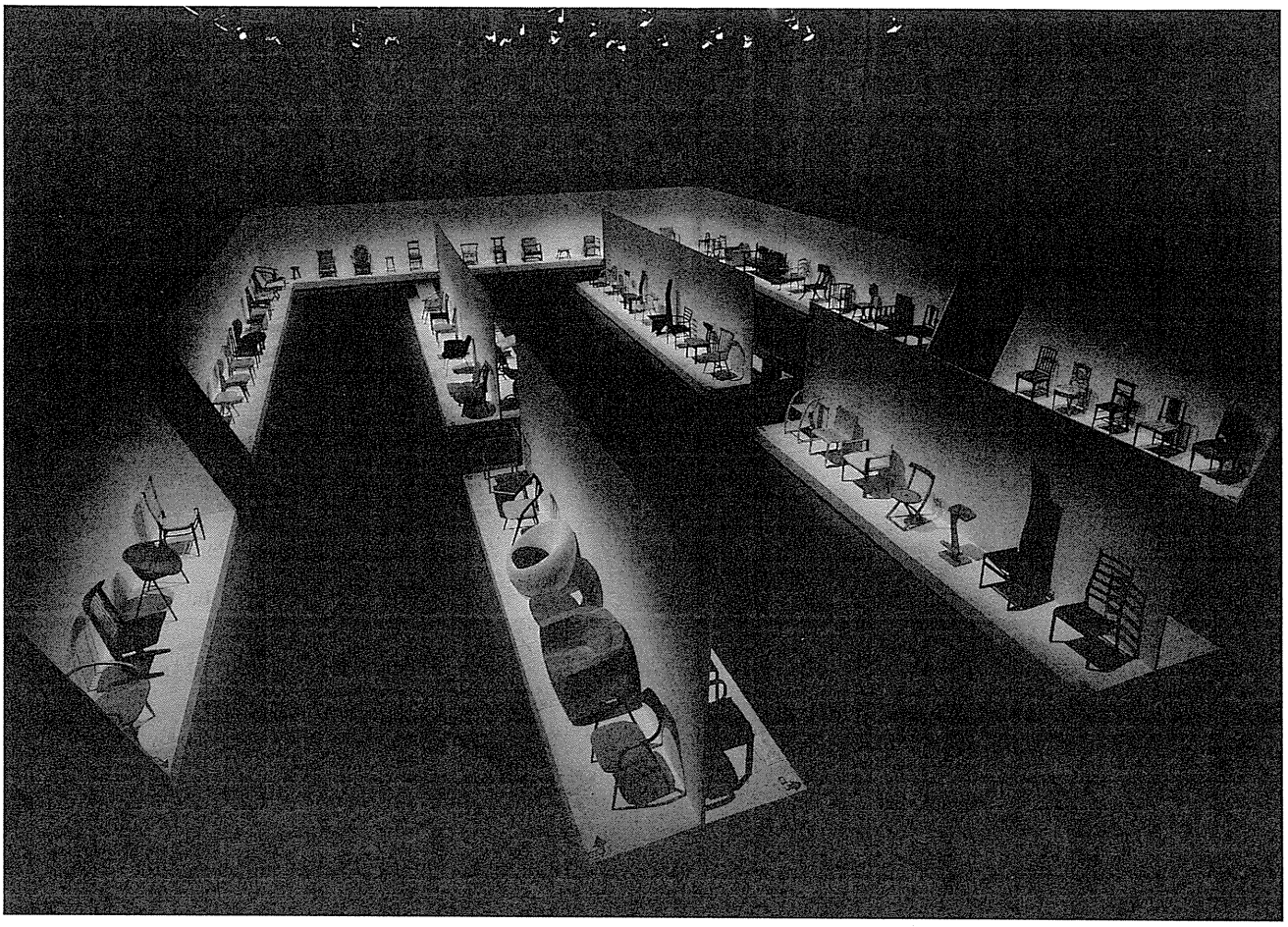
「日本の木の椅子展」は、3回共好評でした。見る人それぞれに向かって、椅子たちは何かを発信していたと思います、それも100点以上もの、個性を持った日本の木の椅子達が、初めて一堂に集まったのですから、その情報量は大変なものでした。次にあらためて、これまでの経緯を振り返ってみましょう。

数年前から今回の「日本の木の椅子展」のプロデュースをした、JID岩倉栄利本部・展覧会委員会委員長と鈴木惠三同副委員長らの間で、今後のデザインの展望が見えにくい今の時代に、今までの100年間を振り返ってみることも必要なのではないか。過去100年間の「日本のオリジナルの木の椅子」をテーマにしたらどうか。無いものは復刻をしたら！本を出そう！先輩達の話しを聞こう！等の考えがあり、また飛騨木工連合会が協力しようとの話し合いもありました。

一方「世界インテリアデザイン会議」に併せた「国際インテリアデザインフェア」の企画テーマを、「過去を振り返る」とし、そこから今後の展望を探るに決まったりと、「日本の木の椅子展」に関する機運が盛り上がっていました。つまり急に出来あがった企画ではなく、布石、伏線があったこと、多方面の協力があったことが良い結果に結び付いたと言えましょう。

- 第1回は、1994年9月6日〜11日、'94オール飛騨・高山木のふれあいフェスティバルにて。
- 第2回は、1995年10月4日〜8日、「IFI '95名古屋」国際インテリアデザインフェアにて。
- 第3回は、1996年3月7日〜12日、東京・新宿・リビングデザインセンターOZONEにて。

それぞれ当初の予想を遙かに上回る盛況でした。なかでも東京におけるシンポジウムは満員、そして展示会場では、JIDの出展デザイナーによる直接的なトークや裏話等もあり大好評。さらに滅多にお目にかかれない先



明治から現代までの108脚＋特別出展10脚のディスプレイ

輩諸兄の方々の話や、今後のデザインの世界を切り開いてくれるであろう若い人々の熱意等が入り混じったパーティーなど、JIDにとって久々の良い催しだったと言ってよいでしょう。また、出版物の「日本の木の椅子」（商店建築社）やＢ１サイズの大型カラーポスター等も効果的なものとなりました。

「日本の木の椅子展」のこの成功は、多くのJID会員、個人、関係機関、製作企業など、そして「リビングデザインセンターOZONE」の多大のご理解とご援助によって出来たことであり、改めて感謝の意を表明させて頂きます。

「日本の木の椅子展」はこれで終わったわけではなく、現在の108点の椅子を出発点に今後さらに充実させ、願わくば常設の展示スペースや、海外での展示会開催など、「日本の木の椅子」のアイデンティティーを、JIDが長いスパンの中で大きく育ててほしいと願っております。

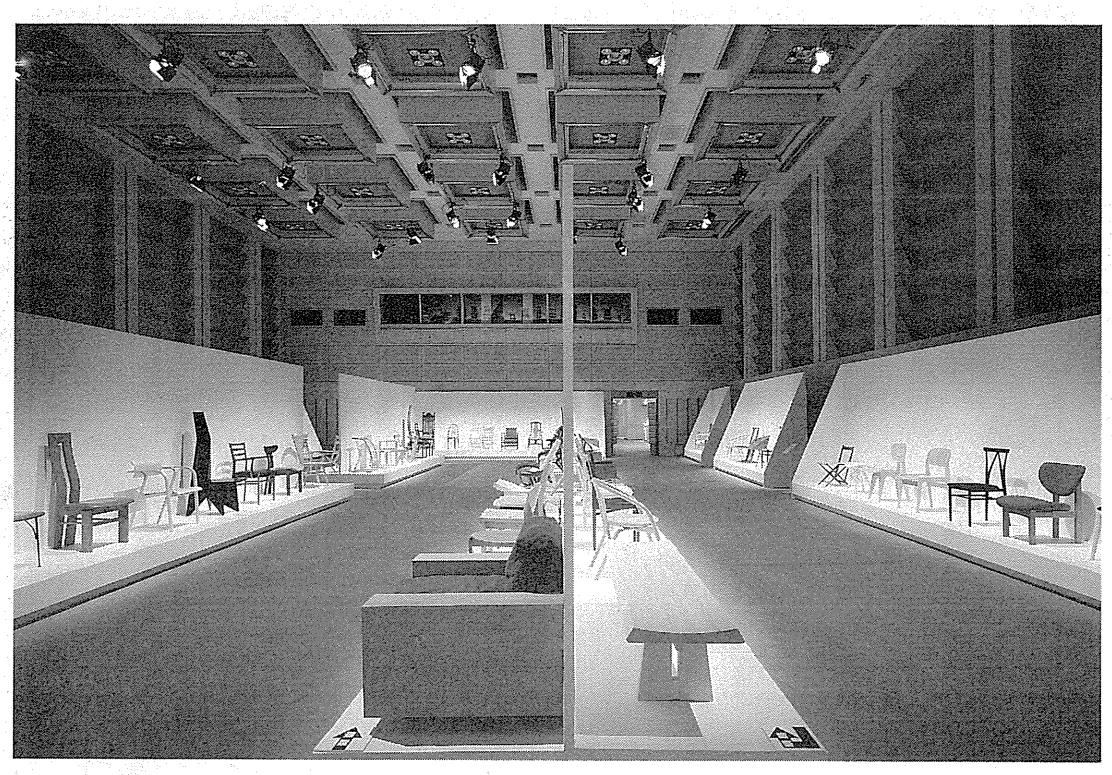
「日本の木の椅子展」の企画プロデュースを通して

本部・展覧会委員会委員長　岩倉　榮利

1991年、JIDで初めて展覧会委員長に就任した折に、「デザイン供養」というイベントに携わり、その中で「日本の近代木製家具展」の企画を行いました。そしてこのときの成果をもって掘下げてみたいと思ったことが、今回の「日本の木の椅子展」にとりかかる契機となったのです。

そんな折、JID会員の鈴木惠三さん（BC工房）と雑談する中で「戦後50年の日本の家具を振り返ってみよう」「いや、あと50年加えて100年で100脚を選ぼう」という話しの展開から、「日本の木の椅子」は具体化し始めました。

JID展覧会委員会のメンバー約10人で何度も会合を開き、日本で製作された木製小椅子の調査、収集、復刻、分析などを通じて日本の生活文化を探り、「日本の木の



入口と反対方向から見る、中央が特別出展品

椅子展」の出展品を、次のような視点で選定いたしました。

①その時代を象徴する椅子。

②その時代で高い評価を得た椅子。

③専門家の評価に拘わらず、よく売れた椅子。

こうした条件にかないながら、世界に誇れるオリジナリティーを持った椅子こそが「日本の木の椅子」であるとし、この会場に並ぶ118脚を選びました。ご覧になった方は、日本の椅子デザインのオリジナリティーの高さをきっと感じて頂けたと思います。

「日本の木の椅子」の選定はきわめて難しいことでした。今回の出展品以外にも、素晴らしい椅子がリストに並んでいます。そして、私たちが知らない名作や傑作が、日本のどこか、歴史のどこかにまだまだあるはずだと思っております。「日本の木の椅子」の探究は、今回の展覧会が集大成というわけではなく、これが始まりであるとも位置づけています。

インテリアや家具に携わるデザイナーとして、私たちはいままでの100余年間と、この118脚を謙虚な気持ちで振り返りたいと思います。そこには、西洋を模倣しながらも日本のオリジナリティーを築いてきた椅子のデザインの歴史があり、その歴史を辿ることでこれからの100年のビジョンが見えてくるように思えます。

ここに集めた118脚に次ぐ119番目からの「日本の木の椅子」が、より素晴らしいものとして生み出されるために、この展覧会が布石となれば幸いです。

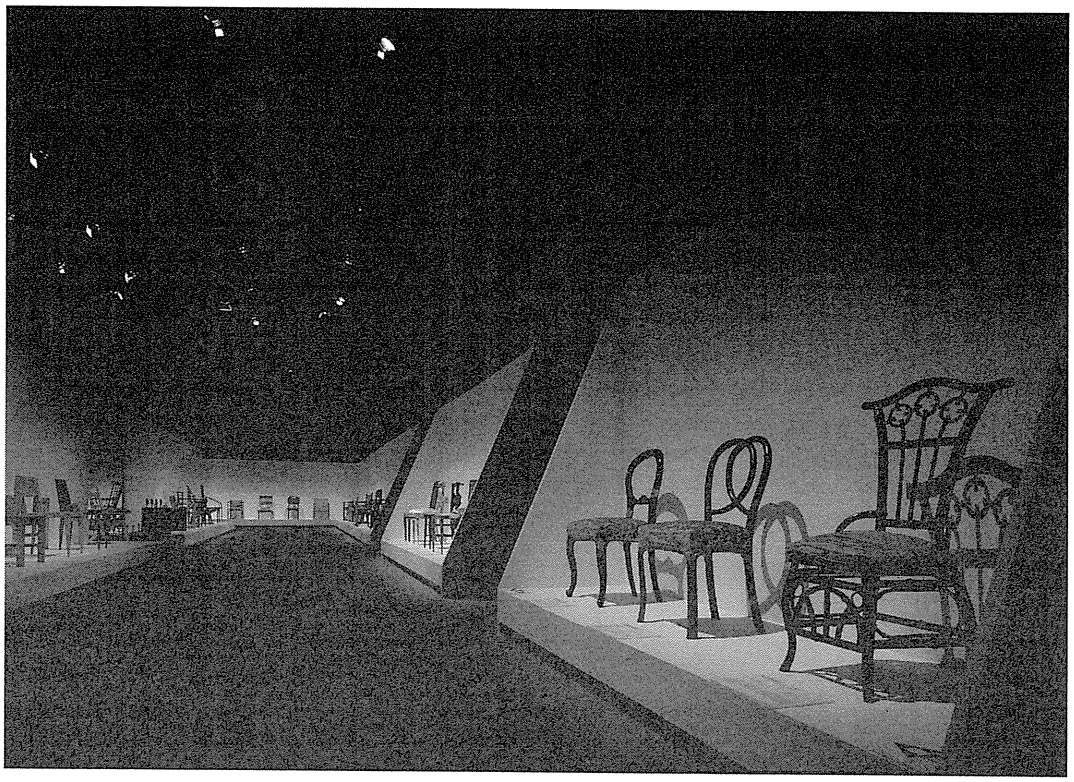
（注）高山・名古屋では108脚でしたが、今回、特別展示として10脚を加え、計118脚としました。

高山から名古屋へ そして東京へ

本部・展覧会委員会副委員長　鈴木　惠三

日本の椅子たちの旅は、3年がかりの長い旅でした。東京展も、お蔭様で無事終了しました。ご協力くださいました家具メーカーの皆様、賛助会員の皆様、JIDの会員の皆様、ご協力ありがとうございました。

目標入場者数を大きく上回る、約13,000人の人々が熱心に見てくださり、なかでも会期中の日曜日には、4,000人を超える入場者に、会場は「満員御礼」の状態。特に若者たちが、熱心に1脚1脚に座わって確め、椅子をひっくりかえしてうなづき、椅子のデザインと作りの部分について学んでいる様子に、大変嬉しく感じました。皆さん、「名作椅子」を真近に見、触れる喜びを味わってくださったのでしょう。



右3脚は1870年代、ここを起点にして年代順に展示した

「OZONE」と「JID」が主催した今回の「日本の木の椅子展」は、多くの若者たちと一般の人々へ、日本の椅子デザインの流れを、実学として刺激を与えることができたのではないでしょうか。このことは、いつか、きっと日本の椅子デザインに、そして椅子づくりに、大きなエネルギーが生まれることを予感します。

今まで、なかなか整理体系ができなかった日本の椅子の歴史とデザインの流れを、JIDが展覧会として提示できたことは、日本のインテリアデザイン、工芸デザイン、家具デザインに大きな意義を与えたのではないでしょうか。

JIDが果たすべき方向を、一会員として強く感じています。JIDのやるべきこと、JIDがやらなければならないこと、それらの1つひとつを、会員が会員と共にやりとげる中から、日本のインテリアデザイナーの役割りが見えてくるような気がしています。しばらく、充電期間をたっぷりとり、次の「日本の木の椅子展」を企画し、皆様と共に活動したいと思います。そのときは、再びよろしくお願いいたします。

JIDの皆様の協力に、感謝、感謝でいっぱいです。今流にいえば「超感謝」。ありがとうございました。

「ヒモイス」への回想

名誉会員　渡辺　力

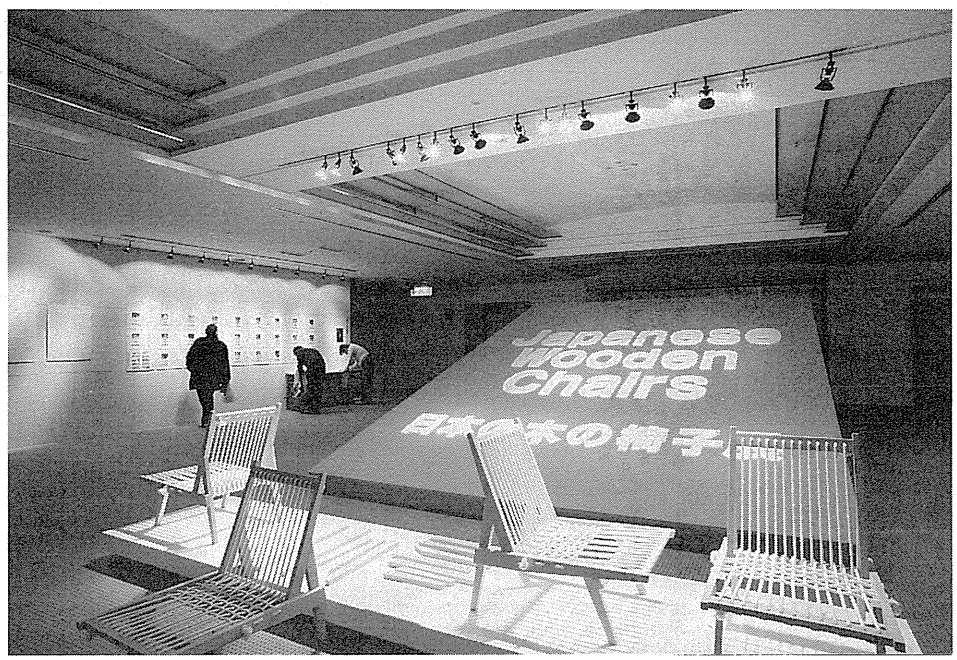
こんな貧乏くさい古いイスを今更 —— とお考えになる人もいると思います。1952年という敗戦後7年目。日本は、国としても、人々も貧しかった。インテリアの材料にしても、例えば壁装材、まともに使えそうなのは、葛布か洋服の芯地、これを経師屋さんは袋貼りにして貼っていました。家具用金物もひどく貧弱なものしかなく、デザインという言葉すら社会通念として通用しなかった、というのが現実でした。

ヒモイスは、端的にローコストをねらったものでした。その当時、どこの家にもあった座布団を、座と背にクッションとして使う考えでした。ロープは綿の三つ撚(よ)りですが、このアイデアは、1830年頃シエーカー教徒がベッドに使っていることを4～5年前に始めて知りました。ゆるんだロープを締め直す治具も作られていました。

戦後、道産の楢(ナラ)材が、欧米に輸出されていて、吋(インチ)板が木工場でよく使われていました。安いラワン材も輸入されていましたが、これは使う気にはなりませんでした。

今は亡き倉俣史郎が、脚のないイスを作りたい、と私に洩していました。私も全く同感でした。座と背のついた4本脚のイスは、4600年も続いています。脚の処理は、ほんとうに厄介なものです。

脚のないイスに、限りなく近づけたい —— 21世紀への課題としての提案です。



ホワイエに展示された「ヒモイス」の完成品と全体のパーツ

「会場レクチャー」の試み

関東事業支部会員　田中　聰行

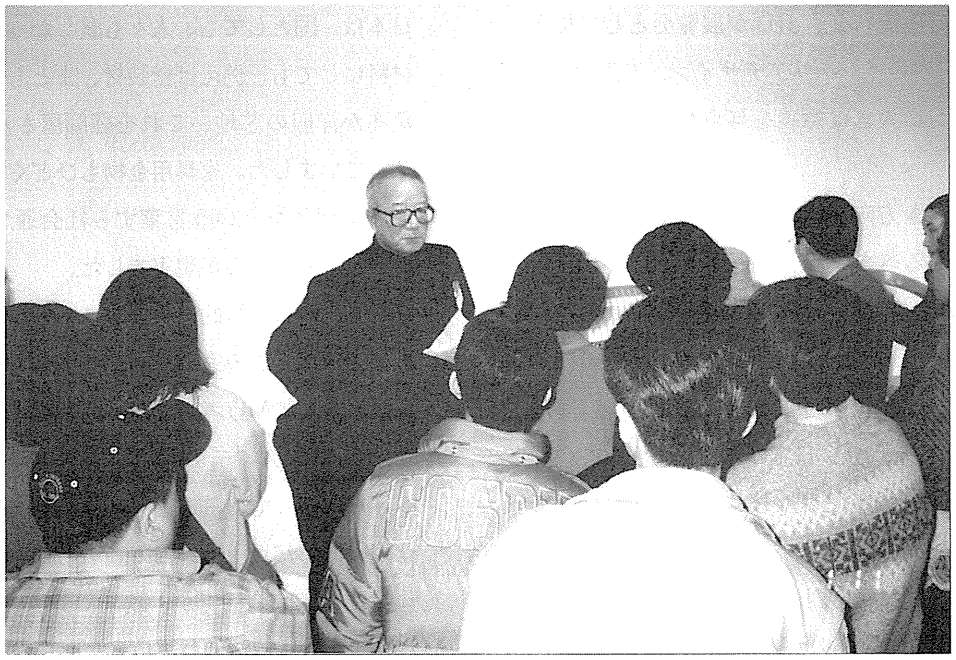
3月11日午後2時、この椅子展を担当するJID会員の鈴木惠三さん（BC工房）の紹介から、私の会場レクチャーは始まる。

月曜日の午後で、聴衆が集まらないのではと危惧していたが、それでも20名位私の周りに集まる。

入口ゾーンの「ダルマ椅子」は鹿鳴館で使われていたこと、明治の指物師が日本の素材で意訳でなく直訳的に、洋風文化を導入しようとした苦労話をする。

「ヌーボーチェア」など、当時のデザイナーのデザインに対する素直な憧れが、今の人をひきつける魅力の源泉であること。

日本楽器の「文化椅子セット」が、庶民の生活の道具として始めて登場し、豊口克平先生の実験的試みの日本



JID会員（会期中計12人）による「会場レクチャー」によって、展示品を順次説明、写真中央は今崎　務会員

の近代デザインのプロトタイプとしての、「肘掛椅子」につながる話をする。

戦後の米軍特需家具「折畳み椅子」は、私個人の懐かしさをこめて語り、当時どこの家にもあったミシンと南京椅子の話、剣持　勇先生の指先で触わる厳しいチェックを実演して見せ、「ペリアンチェア」「バタフライスツール」等の時代を越えたデザインのこと、ベストセラーの秋田木工のスツール、水之江さんの1つの椅子に対するこだわり、長さんの曲面の独特な創り方、渡辺力先生、篦さん、松村さん等多くのデザイナーにとって、デザインが日常生活の中で自然に受け入れられたよき時代の作品群を夫々に話をする。

コンペから製品化された田辺さんのスツール、垂見さんの座イス、私の小椅子等に触れ、最後に現代の椅子を吉村先生、岩倉さん、坂本さん、喜多さん、阿部さん、寺原さんの作品を通して語る。椅子本来の説明よりも、私との付き合いで得た諸先生方のデザインに対する姿勢を主に話したことは、職業年令も異なる聴衆には、ある種の感動があったようです、最後に40名を超える人の拍手で終り、また、若い学生達の直接の謝辞が嬉しく企画の有意義さを感じた。

セミナー「日本の木の椅子100年 ― デザイン史に学ぶこと」に参加して

関東事業支部会員　瀬尾　清

3月8日「日本の木の椅子展」の第1回セミナーに参加した。

当日の会場は、同僚会員の出席がやや少なかったものの満席の状況で、デザインに携わる先生や学生諸君はもとより、一般の方々の椅子やデザインに対する関心の高さをあらためて実感した。

さて、家具デザイナーとしても大先輩であるセミナーの講師の中には、私が学生時代に講義を受けた先生もおられて、久し振りに生徒に戻った気持ちで聞かせて頂いた。

「日本の木の椅子展」の出品者でもある先生方の、作品にかかわるお話しの総てが、そのまま日本の家具デザインの歴史の重要な1ページにつながっていて、感慨深く聞いた。

ブルーノ・タウトをはじめ、シャルロット・ペリアン、フランク・ロイド・ライトの弟子でもあるアントニン・レイモンドといった、日本の近代デザインの創世期に、大きな影響を与えたデザイナー達との出会いやつながりの中でデザインに携わり、影響を受けながらも独自な作

セミナー／「日本の木の椅子100年 ―― デザイン史に学ぶこと」

品を追求するデザイナーとしての姿勢が、それぞれの時代を象徴する日本の椅子を創り出してきた。

実物を見ながら解説して頂いた柳　宗理氏のバタフライスツールや、渡辺　力氏のトリイスツール等は、オリジナリティーの高さといい、完成度の高さといい、まさに世界に誇る日本の椅子の逸品である。

講師を含む先輩達の作品の数々が、次代のあるべきデザインの姿を無言で語りかけているようだ。

今後も続けて頂きたい有意義で貴重なセミナーだった。

セミナー「日本の木の椅子 いいデザインって何んだ？」に参加して

関東事業支部会員　石川　尚

ツルル・・・ツルル・・・、突然、原稿依頼の電話。僕の会員番号は726番、毎年何の活動もせず、通信書類とパンフレットと年会費の請求書とニラメッコをしている不良会員です。今回のセミナーも、僕が知らぬ間に友人が申し込んだお蔭で参加する羽目になり、当日も案の定、立派に不良会員してしまいました。講師の諸先生方には大変申し訳けない話ですが、その～、コックリ、コックリと居眠りをしたのでした。僕の大好きな椅子の話なので、とにかく心地良かったのです。そして諸先生方のお話しをBGMにしてコックリしていると、「ある椅子の夢」を見ました。

その椅子は、クラマタさんの「引き出しの椅子」でした。床や壁にも引き出しがあり、その引き出し達が、楽しそうに出たり引っ込んだりしているのです。棚やテーブルも引き出しで出来ており、とても器用にイロイロなモノがそれにしまわれていくのです。壁の一部には大きな窓があり、その窓からは地平線と、どんよりした雲が見えるのです。椅子と床と壁とその向こうにある景色が一体になるのです。

とても静かで音のしない一日のような気分です。そのような夢でしたがとても心地良かったのです。

ただ単品で存在するのではなく、その椅子から空間や景色や音などイマジネーションがひろがるデザインが好きなのです。あっ！セミナーについてでしたね。そう、そう、同席した友人が「先生方はそれぞれご自分の作品を説明されていたが、いい椅子、いいデザインについてはチンプンカンプン？それより、その夢の話について、これから一杯やらないか！」って。ほんとうに不良会員なのでありまする。ハイ！

「日本の木の椅子展」は最高！〈音を懐かしがったり、ここに居るぞう、がんばってるヨ〉ってワイワイ、ガヤガヤ。108客（脚）人のパーティでした。

最後に諸先生方、司会の鈴木さん、居眠りしてすいませんでした。

セミナー／「日本の木の椅子　いいデザインって何だ？」

「日本の木の椅子展」を見て

関東事業支部会員　高橋　三太郎

この2・3年、何かモヤモヤとした気分でいる。テレビの中のイチローではないが、「変わらなきゃ」と思いつつ。モノにもっと力を、そして暮らしにもっと力を、ということか。今回の「日本の木の椅子展」は、いろいろな意味で、タイムリーであったと思う。

個人的には、年代順に並べられた中で、1950年代までの前半の椅子が好きだ。多分それは、モノの規格化、量産化の手法が確立される前の、人の手を通して（生身の人間がモノの流れるスピードを、ボリュームを制御できるという意味で）モノを作ろうとしていた時代の“力強さ”なんだと思う。

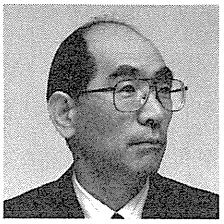
気になっていた椅子がいっぱいあったのだが、1972年発表の松村勝男氏の「ガマイス」の明快さも好きだ。氏のモノを作る姿勢が良く出ている作品だと思う。そして1992年の遺作展の図録の中のこんな言葉を思い出した。

「60年代は池田内閣の所得倍増時代を迎え、東京オリンピックを目指して高度成長へとまっしぐらに進んでいく。だが、デザイン自体は純粋さを失なっていく。何事も、草創期は貴重だと思う。今日のような難しい時代こそ、原点を見つめる必要がある。基本は不変、加えて個人の感性、時代感覚が加味されていく。」

トンボ帰りの東京行きであったが、「もっと真面目に仕事をしなきゃ！」と、叱咤激励された一日であった。

「日本の木の椅子展」を見て

賛助会員㈱天童木工　菅沢　光政



モダンデザインの理想的な姿として、時代を超えた、タイムレスな製品としていつまでも世の中に残ることがあります。その理想に近いかたちで、幸い当社から18点の製品が選ばれ、その多くが、なお、現役商品となっていることに新たな感慨を覚えるものです。

「1960年代は、私にとっても懐かしい時代です。入社仕立てで、なにも分からずに剣持　勇氏や豊口克平氏などの試作の図面を描かされ、また当時のデザインコンペの事務局として、作品の受け付けから試作まで担当し、大変勉強になったことが思い出されます。

想い返せば、やはり1960年代の家具デザインが最も輝いていたように思います。経済環境も良かったことも

会期中の日曜日には4,000人の人で埋まった、写真は閉館後に見入る来館者

ありますが、良い意味で皆が同じ方向を向いていたような気がします。

私が関わった1つひとつのイスにも思い出が多く、すんなりとデザインが完成したときもあれば、四苦八苦して試作を繰り返すこともあり、全てが同じでは無いことを教えられました。デザインのプロセスが様々あるのも、イスのデザインの面白さだと思いますし、そうあって良いと思います。家具が工業製品か、クラフト製品かは、その人の考え方ですし、その曖昧さも家具の面白さとも言えます。

ステージ上に展示されているにも関わらず、構わず座る人が目立った

今回は木製イスに限定していますが、素材を超えて優れたデザインになっているものが多かったようです。木製品の弱いところは、接合部／組み手です。その弱さを補うために、いろいろと工夫をするアイデアが面白く、新しいデザインが生まれる可能性を秘めています。成形合板や曲木のように、構造部材を一体化してしまうのとは別の面白さがあります。残念ながら資源の問題、良材の問題など、これからもこの「木」の環境は良くならないことが分かっています。それをいかに使うか、これからは益々英知が問われることになりそうです。

「日本の木の椅子展」とミュージアム

事務局長　森谷　延周

何回となく会場に足を運んだが、学生さんや若い人達が目立った。始めのうちは、会場の白いステージからお目当ての椅子を床に降ろして座っていたが、その内、ステージの上に乗って、そのまま座る人も増え、最終日にはステージの白い面影は無くなってしまった。

椅子を肌で感じとったわけで、大変良い結果となった。また、出展デザイナー（JID会員12人）による「会場レクチャー」にも、二重三重の輪がひろがり、実物による強いインパクトと肉声による解説が効果的だった。

ところで、このイベントは3回目を数えているが、展示した椅子は「借りて並べて、終わって返す」を繰り返している。現状から考えるとやむを得ないが、このままでよいのだろうか。

今から20年ほど前になるが、豊口克平氏が20世紀の工業製品を、文化の発展の記録として残す「20世紀デザイン博物館」の必要性を強調していた。また、インテリアや家具の生活史の研究で知られる小泉和子氏は、調査・研究・復刻などの一方で、散逸に歯止めをかける努力を行っている。

今秋には、Gマーク40年記念事業として、コレクション展（約400点）の開催が準備されていて、これを契機に恒常的な施設による保存・展示への基盤にしようという動きもある。

つまり日本のデザインの歴史として、各デザインジャンルを総合的につなぎ、恒常的でしかも公衆を対象とした「デザインミュージアム」といった構想を、今こそ具現化する時期が来たように思われる。すでに散逸したもの、散逸しそうなもの、そして、散逸してからでは遅い。このことは、デザインの意義や価値を後世に伝える上からも必要だし、画像や印刷物もよいが、やはり実物のインパクトを優先すべきだ。そして、「借りて並べて、終って返す」といったことに、できるだけ早く終止符を打ちたいと思う。

IFI理事会アムステルダム会議報告

IFI理事　中川　帛子

第17回IFI総会（名古屋）に於いて選任された新理事による理事会が、去る2月22日～25日、からIFI本部事務局のあるアムステルダム市で開催された。

IFI事務局は昨年末、運河に面した町並み保存の古い建物に引越した。界隈は時代を経たレンガ造りの切妻のファサードの連続で、法律によってこれに手を加えることが禁じられているので、中の様子は伺いしれない。新しい建物を建てられないこうした町では、表側一枚を残して常に改造が行われているようだ。

今理事会は、名古屋の第1回新理事会で決定した各理事の業務計画の検討と予算の確認、新事業と継続事業の確認と方法論の討議等であった。

◎会議の大要と確認、検討諸事項は次の通り。

- 新雑誌の発行は、経済状況が好転するまで無期延期とする。これに代わる会員への情報伝達手段として、FAXによる「IFInews」を開始。
- 会員団体との交流促進と活性化、相互理解の一助として、昨年パリで開催し、高い評価を受けたフォーラム“未来のオフィス”のような企画を、各国の実情に合わせて続ける。テーマはオフィスの他、“DESIGN FOR ALL”等。
- IFI加盟を求める教育関連団体が増加する折から、承認に先立ち、加盟希望団体の資料をIFI会員に公表し、反応を参考にする。
- 1997年の国際デザイン交流協会主催／国際コンペの審査委員に、IFI理事長が招待されており、従来から少ないインテリアデザイナーの当コンペへの参加を積極的に呼びかける。
- '97アイルランド会議のテーマ“SENSE OF SPACE”を軸に、学生によるインターネット及びファックスを用いた世界同時多発リレー方式の学生プレゼンテーションを、最終アイルランドまで続ける計画が提案され、大筋で実施が決まった。イケア基金が提供され次第、実施要項を作成し、参加大学の呼掛けをする。
- 地域代表による理事会構成案の採用決定を踏まえ、実行に向け具体案を検討。各地域の実施に関する会員の反応を促し、次回の理事会で具体案をまとめる。
- その他、インテリアデザイナー／建築家の称号の法的保護問題、ヨーロッパ国際環境保護協会推進のエコラベル実施運動関連事項等々検討事項満載の会議であった。

右から3番目が中川帛子IFI理事

「IFInews」抜粋 '96年・1月号

●情　報

・名古屋総会にてIFI会員20%増加。

・IFIフォーラム“未来のオフィス”を昨年9月パリで開催、公式記録報告書（英文）を各協会に配布。

・IFIフォーラム“デザイン保護”を昨年10月アムステルダムで開催、記録集を作成した。

・データベース“DESIGN FOR ALL”を名古屋総会でフロッピーと印刷物で発表（英文）、実費で求められる。

●理事会ニュース

・IFI 理事会：第1回理事会を2月にアムステルダムで開催。

・新理事の担当任務

理 事 長　D. HANDY：総括と他団体との折衝

次期理事長　FRANDSEN：国際学生事業の促進
タイトル保護及び業務行動規定問題

前理事長　BERUBE：IFIフォーラム促進

中川帛子：会計財務監査、地域代表理事制実施関連担当

H. CLAEYS：資格認定機関への協力と連絡、国際的業務行動規範に関する関与

D. LAUBSCHER：内外情報、連絡担当、会員間のインターフェースとしての情報交換の新手法を構築

●会員ニュース

・日本：JID

「IFI '95 名古屋」に合わせて開催記念として“世界のインテリアデザイナー作品集”を出版。掲載にJID会員及び14団体の参加があった。

・スペイン：EAAD

DSCUELA DE ARTES DECORATIVAS校はこの度独自のインテリア建築学位の設置を発表

●求人情報

・USAの大学でデザイン教育者を募集中

1. WEST VIRGINIA UNIVERSITY
2. UNIVERSITY OF SOUTHERN MISSISSIPPI
3. RHODE ISLAND SCHOOL OF DSIGN
4. LOUISIANA STATE UNIVERSITY
5. VIRGINIA COMMONWEALTH UNIVERSITY

（詳細はIFI事務局まで）

●コンペ情報

「WOOD OF FINLAND」

フィンランドの木材を健全な生態系の下で建造、住宅、工業用品の原材料に用いることを啓蒙する目的で、この国際コンペを開催

区分1／建造、住まい、環境の革新

区分2／木材工業製品

応募作品提出期限：1996/7/31

賞金：グランプリ FIM 300,000　2位 FIM 150,000

コンペ事務局：FAX：358-0-132-4599

●その他

海外の行事及び出版情報

（抄訳／中川　帛子）

1996年「JID賞」について

選考委員会委員長　長岡　貞夫

日本のインテリアデザインの発展と、インテリアデザイナーの職能の向上と共に、豊かな社会と文化の構築に寄与する目的で設けられた「JID賞」は、改称前を含めると今年が第27回目になります。

この間、多くの優れたデザイン、研究・著作・業績を表彰して来ました。デザイン界にあって、「JID賞」のように、27年もの長期にわたって継続している賞は希有といえます。

今年も、この歴史的な意義を踏まえ、21世紀を透視する優れた作品や業績などが、多くノミネイトされることを期待しています。

尚、応募は自薦、他薦を問いません。

締切りは1996年6月10日（月）当日消印有効です。

ファブリック壁装のお薦め

日本室内装飾織物工業協同組合連合会
理事長　川島　春雄

昔から、建築の出来映えを誉めるのに、「一壁、二障子、三柱」と言う言葉があります。これは建築工事を上手に成就するもしないも壁仕上げの技術に頼ることが多いことを意味しています。このことからも内装工事のうちで、壁工事がいかに大切であるかを知ることができます。部屋ごとに壁面仕上げの最適材料の選択を行い、建築工事の質を高めることが、お客様の満足感を得ることになります。

日本の住宅における本格的なインテリアの洋風化は戦後であり、量的充足時代、質的充足時代を経て、人間的価値の創造の時代になりつつあります。住は憩いの場所であり、集いの場所であり、人それぞれの個性を発揮する場であり、子供にとっては情操教育の場でもあります。

憩いの場及び集いの場を創造していくに当って、与えられた商品、あり合わせの商品、クールで無機質的な商品だけでは不満だと思う気持ちが、ユーザーにとって益々強くなって来ます。自分の個性に合った部屋の雰囲気や、用途にあった、又建築物に適合する商品が今以上に要望されてきます。

そこで私達は提案します。繊維の壁装材がこのような要求を満たすに近いものであると。

何故そうなのかは、次に挙げる特徴でご理解頂けるものと思います。

●織物壁装材の特徴

①貼ることで豪華さと高級感が出せる。
②織物独特の柔らかさで暖かみのある雰囲気が引き出せる。
③小ロットで生産が出来る。
④色・柄が任意に選択できコーディネートしやすい。
⑤素材の質感がそのまま表現できる。
⑥吸音・保温・保湿等の効果に優れている。
⑦下地素材を選べば、比較的結露しにくい。
⑧天然（綿、麻）又は天然に近い（レーヨン）素材が使用されている。
⑨リサイクルが可能である。
⑩施工においても永年の研究成果により比較的容易にできる。

織物壁装材は施工性の改良も進み、より使いやすくなっています。又、壁のクラツク、たわみ等によるダメージが少なく、急激な振動に強い性質を持っています。

平成７年度・第５回理事会報告

①会議名：平成７年度・第５回理事会
②日　時：平成８年１月26日（水）13：30〜16：30
③場　所：㈳日本インテリアデザイナー協会
本部事務局　会議室
東京都新宿区西新宿３-７-１ 新宿ﾊﾞｰｸﾀﾜｰ 8F
④出席者：理事総数15名中（本人出席13名）
（理事長）長岡貞夫
（副理事長）泉　修二、栢原秀榮
（理　事）淺田弘之、浅野盛治、宇賀敏夫
川上信二、白石勝彦、中川帛子
中川千年、福田友美、山口道夫
森谷延周（事務局長）
（委任状）小坂希八郎、清水忠男
（監　事）榎田　均（欠席）、金子誠之助（欠席）

⑤議　題

Ⅰ．議　案

第１号議案　後援・協賛名義承認の件
第２号議案　会員入退会承認の件
第３号議案　議事録署名人選任の件

Ⅱ．報告事項

(1)　各事業支部及び本部各委員会事業推進状況
(2)　平成７年度収支状況報告（12月末日現在）
(3)　平成７年度会員入退会状況
(4)　年会費未納状況
(5)　平成８〜９年度役員選挙開票結果報告
(6)　新名誉会員推挙について
(7)　日本デザイン団体協議会代表者会議
(8)　その他

⑥議　事

森谷事務局長より「理事総数15名中、本人出席13名、委任状２名で本理事会は成立した」旨報告。引続き、長岡理事長が議長となり議事に入った。

Ⅰ．議　案

第１号議案　後援・協賛名義承認の件

議長は、事務局長に説明を求め、事務局長は、下記２件について説明した。議長は、承認を諮り、異議なく承認された。

◎「'96全国伝統的工芸品まつり」　後援（継）

1996年2月29日（水）～3月4日（月）

主催　㈶伝統的工芸品産業振興協会

◎「インテリアプランニング賞'96」　協賛（継）

告知開始：1996年2月9日（金）

表彰：1996年9月

主催　㈶建築技術教育普及センター

第2号議案　会員入退会承認の件

議長は、事務局長に説明を求め、事務局長は、下記24件について説明した。議長は承認を諮り、異議なく承認された。

入会　正会員（2件）

氏　名	支部	保証推薦人
東島尚賢	九州	高瀬　守博・石末　軍人
佐名川威志	関東	福田　友美・森谷　延周

退会　正会員（20件）

氏　名	支部	
大島正之	中部	
今岡登志	中部	
篠崎秀一	関西	
田阪春夫	関東	
高見　登	関西	
坂野隆一	関東	
棒田邦夫	中部	
与座嘉夫	関東	
伊藤真介	関東	定款第8条第2項(4)よる
山下岩男	関東	同　上
山本佐代子	関東	〃
向井修二	関西	〃
林　夕起夫	関東	〃
井上俊彦	関東	〃
高丸重信	関東	〃
中沢　浩	関東	〃
中島雅範	関東	〃
柴田龍介	九州	〃
稲垣哲也	関東	〃
吉本光一	関西	入会取り消し

退会　賛助会員（2件）

社　名	支部
日本装備㈱	関東
ヒストリカルデザイン㈱	関東

第3号議案　議事録署名人選任の件（2名）

議長は、福田友美・森谷延周両理事の承認を諮り、異議なく承認された。

Ⅱ　報告事項

議長は、各事業支部及び本部各委員会については各担当理事、本部事務局については事務局長に活動に関する報告を求め、それぞれが資料を基に報告した。

(1)　各事業支部及び本部各委員会事業推進状況

● 関東事業支部（浅野）

「'96 NEW YEAR'S PARTY」の準備状況、及び新「BOSH」の企画に触れたほか、3月に実施の高齢者・障害者に関する疑似体験セミナー（筑波技術短大）や鎌倉「二階堂学舎」見学会の計画などについて報告。

さらに「デジタルデザイン研究会」の動きについて言及した。

● 中部事業支部（宇賀）

平成8年度事業計画（案）、及び組織面の内部強化や各種委員会を定例的に重ねている旨報告。なお、建設中の「国際デザインセンター」は11月に完成予定。

● 関西事業支部（栢原）

支部情報誌「ECHO」第7号を発行したこと、各種委員会の開催、及び阪神・淡路大震災に関するアンケートを発送したことなどを報告。

● 九州事業支部（中川・千）

次期の支部役員選挙を実施、最終的に山永耕平支部長を選出したこと、及び支部例会などについて報告。

● 選考委員会（長岡）

前委員会の引継ぎ事項を踏まえて、1月30日に第2回委員会を予定。可能なことから順次実施したい。また同時に実施スケジュールの詰めを行うと報告。

● 総務委員会（森谷）

懸案となっている委員会細則の詰めを今後検討したい。また、選考委員の選挙規定の検討も課題となっている旨報告。

● 組織委員会（淺田）

名誉会員制度に関して、年度内にアンケートを実施、その結果から複数案を一つに絞り次期委員会

に引継ぎたい。また、準会員（仮称）については、当面各支部の動きの中で考えてみたいと報告。さらに、「第2回日中インテリアデザイナー友好訪中団」案について言及した。

- 国際委員会（中川・帛）

懸案の「地域代表制」に関して、2月開催のアムステルダム理事会に、理事各国がそれぞれ意見を持ち寄ることになっている。地域区分、財政面などJIDとしてのスタンスを考えながら望みたい旨報告。

- 交流委員会（小坂）

小坂担当理事委任出席のため、事務局長が代理報告。次回の「デザイン供養」に関して、平成9年7月鳥取県境港が開催候補地としてあげられている。また、懸案の通産省やJID賛助会員との交流会を実施したい旨報告。

- 広報委員会（川上）

「IFI '95 名古屋」での国内外関係者の名刺をもとに、広報先名簿をまとめ直したい旨報告。

- 出版委員会（福田）

「世界のインテリアデザイナー作品集」をIFI加盟国に、また海外参加掲載者に借用原稿を頒布案内と共に送付したこと、及び販売委託先の販売状況が好調である旨報告。

- 教育・研究委員会（清水）

清水担当理事委任出席のため、事務局長が代理報告。

来る4月中旬、高齢者と阪神・淡路大震災それぞれの登録研究グループ成果発表、すでに実施の「ドイツ研修ツアー」、実施予定の「筑波体験セミナー」を併せた合同発表会の開催予定を報告。

- 展覧会委員会（山口）

「日本の木の椅子展」（3月7日～12日新宿パークタワーホール、主催/JIDとリビングデザインセンターOZONE）の開催に向けて準備中。展示、セミナー、会場レクチャー、PR計画及び財政面を併せて報告。

- 報酬基準委員会（白石）

懸案の「報酬基準ガイドライン」を12月初旬に完成配布した。その内、一部解釈に配慮不足の指摘があり、理事会の複数意見を踏まえて、その方策を白石担当理事に託することとした。

- デザイン保護委員会（泉）

3月にJIDAと共同で「保護研究会」「事例研究会」案が浮上しているが、具体化には至っていない。JID内部の検討会も視野に入れている旨報告。

- 事業委員会（長岡）

継続して基本的検討を重ねているとし、収益事業の推進、当委員会の特別委から経常委への移行などが検討されていること、及び「TOTO出版」における出版事業や「DESIGNERS AID '96」などについて報告。

- IFI '95委員会（長岡）

「IFI '95 名古屋」の総括はJID NEWS 10・11月号に報告した。現在運営会事務局では、「報告書」を作成中。来る3月15日に最終の理事会が開かれる予定と報告。

(2) 平成7年度収支状況報告（12月末日現在）

資料に基づいて、前回理事会以降、12月末日現在の収支状況を説明、収支が逆転しているが、事業の実施に伴い支出が集中したこと、一方、各種の入金が遅れていることがその要因といえる。今後の動きを充分見極める必要があると報告。

(3) 平成7年度入退会状況

資料に基づいて、平成8年1月26日現在の入退会状況を説明、当初見込みに対して、入会数が約2分の1、それに対して退会数は約2倍であり、今後の努力が強く望まれると報告。

(4) 年会費未納状況

資料に基づいて、平成6年度及び7年度の年会費未納状況を説明、ほぼ例年に近いものの、経済状況を反映して遅れ気味と報告。

(5) 平成8～9年度役員選挙開票結果報告

資料に基づいて、役員選挙の開票結果を説明、例年通りの低投票率であり、なかでも、監事へ投票が極めて低い。次回には何らかの改善を図る必要ありと報告。近日中に諾否の打診を行う予定。

(6) 新名誉会員推挙について

資料に基づいて、幸重篤典、三輪正弘、堀内啓二、宮坂博文の4会員が、平成8年度からの該当者であると報告。のちに諾否の打診行う予定。

(7) 日本デザイン団体協議会代表者会議

去る12月18日、所管が検査デザイン行政室からデザイン政策室に移管されたのを契機に、8団体代表者、及び事務局長、さらに日本産業デザイン振興会を加え、今後の検討課題とデザイン政策について、初めての意見交換を行った。

(8) その他

●訃　報

山田善唯（正会員／関西）
平成7年9月 7日逝去　享年66才

森田良夫（名誉会員）
平成8年1月 1日逝去　享年80才

要　信一（名誉会員）
平成8年1月 3日逝去　享年86才

桝谷博行（正会員／関西）
平成8年1月13日逝去　享年66才

●次回理事会開催予定（'95第6回）
平成8年3月27日（水）

役員辞退と次世代へのバトンタッチ

関東事業支部会員　白石　勝彦

この度の役員選挙にあたり、図らずも役員候補として選出されましたが、来る8月をもって70歳となり名誉会員となることもあるので、役員を辞退させて頂くことと致しました。役員選挙の際に、私にご投票頂いた会員の皆さんには、ご期待に沿うことができず誠に申し訳なくお詫び申し上げます。

顧みますと、日本室内設計家協会設立当初より協会にお世話になり、生涯の約半分の年月を協会と共に過ごしたことになります。その間の約半分を会員各位のご支援により、非力ながら役員として協会の運営のお手伝いをさせて頂きました。ここに改めてお礼申し上げます。

その間、私として最も印象の深かったことは、理事長在任中にIFIに加盟したことでした。当時、国際的な活動よりも、国内に於ける職能の確立の方が、目下の急務であるとのご批判もありましたが、昨年秋、成功裡に開催された「IFI '95 NAGOYA」の実現は、実行に当たられた会員その他の関係者に対して感謝の意を表すると同時に、私にとっても感銘深いことで、やっとIFI加盟の意義を認知して頂いたという思いでした。

OZONEへの事務局の移転、IFI '95 NAGOYAの開催、今回の「日本の木の椅子展」の成功など、日本インテリアデザイナー協会の社会的な価値評価が会員各位のご努力により高まって来た昨今、IFI '95 NAGOYAのテーマであった、新しい波（New Wave）が胎動しつつあることを身をもって感じます。

ここで精気あるれる次世代の会員の皆さんにバトンタッチして、協会の益々の発展を祈念する次第です。

彌栄！

要　信一さん

名誉会員　川﨑　浩

堺デザイン協会の新年会と、総会後の乾杯は要さんと決まっていた。世評慨嘆・悲憤慷慨、早口でそれが長い。私が目くばせをすると「川﨑さんが止めというてはりますから……」「では乾杯！」小さな身体に似ず声が大きい。恒例の音頭はもう聞けない。

明治42年（1909）の大阪のまん中、南区の島之内の生れ、生家は小間物屋（コマモノヤ）の由、所謂船場（センバ）のボンチ（大家の長男のこと）である。昭和6年京都高等高芸学校・図案科卒業（現京都工芸繊維大学）（私は昭和9年に旧制中学に入学）助手として母校に3年残り、その後、大阪の桃谷順店館（クラブ化粧品の発売元）の意匠課長として実業に入る、グラフィックデザイナーのはしりである。戦後独立してデザイン事務所を開設、又各種のデザイン系専門学校の教師を兼ねていた。

私が知遇を得たのはずっと後のこと。粋（すい）なお方であると思った。江戸前の粋（いき）とは違うのである。いかにも大阪の古い文化が背広を着て、ベレー帽をかぶっていたのである。

数年前、よくわからないが、ホノルル大学から名誉東洋哲学博士の稱号を贈られたとかで、お祝いの席に呼ばれたことを思い出す。そんな方であった。

平成8年1月3日没　　享年87才

長男の信行氏（コムインターナショナル代表）はご存知の商環境設計家協会の常務理事で関西地区代表である。厳父の志を継がれている。

森田良夫名誉会員を偲ぶ

名誉会員　村尾平格

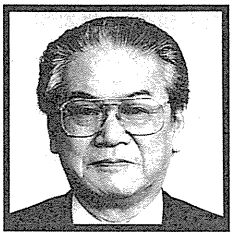
平成8年元旦、静かな夜が明けて今年も新しい年を迎えたという清々しい気分になった処に、森田夫人からの訃報を受け驚き入った次第でした。約半年前から肺炎で入院療養中だったそうですが、誠に残念なことでした。

森田君との付き合いは、1934年京都高等工芸（現京都工芸繊維大学造形工学科）入学以来の60有余年の長い付き合いでした。彼は入学時代からデザイン方面に対して非常に早熟でした。生家が京都の本屋さんであったことも影響していたのでしょうが、当時の学校教育は厳しい絵のデッサンと、美術史、建築史、その他語学等の一般教養で、デザイン関係はバウハウスの教育の追従であったような気がします。それもナチスの圧迫も伝えられたりしていた時期でした、欧州ではアールヌーボーが全盛を過ぎ、コルビュジエー、グロピユースをはじめ多くのインターナショナル新建築が全盛であり、美術ではキュービズムからダダ、シュールレアリズム、アブストラクト等が大きく展開しており、現在とは違って遅々とした情報伝達の世情の中で、私共はマゴマゴしていたものですが、森田君は早々に情報をキャッチして私共に教えてくれて、学校で受ける授業より彼から受ける情報に感激したことを記憶しています。

卒業後は土浦建築事務所、終戦後は村田建築事務所、パシフィックハウス等に勤務、その後は自営で主にインテリアの仕事をやり、愛知芸術大学の講師も約20年間続け、後進の指導に情熱をささげていました。私も彼と仕事を共にしたこともありますが、デザイン上の一撤な姿勢は誠に見事なものでした、若い時代の追想を述べ謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

桝谷博行会員を偲ぶ

関西事業支部会員　中村　洋介



昭和47年頃、当時の上司と店舗設計の仕事で、桝谷先生とお逢いしたのが初めての出逢いでした。それ以後、奈良商工会議所会館、橿原神宮社務所等、多くの仕事をご一緒させて頂きました。これらの仕事は、建築家桝谷博行先生と、インテリア担当中村との組合せでした。デザインの方向性をはっきり意志表示した後は任してくれる建築家でした。（建築家との協同作業で、任しきれない人が多い。）先生はスケールの大きい人で、デザインの詳細よりもっと世間を知れ、経済を知れと、よく言っておられました。

ご自身は、奈良県建築士会会長、建築士会会誌委員長、建設省建築審議会委員、奈良商工会議所副会頭等、建築関係だけでなく、巾広く、活動してこられました。

昭和62年頃より、インテリアデザインの重要性と正当なデザイン料をクライアントより頂くためにはどうすべきか、お逢いするたびにそれらを中心に意見交換をしました。

それからしばらくして先生は、日本建築士会連合会インテリア関係資格者特別委員会委員長に就任されました。（インテリアプランナーの設立に、尽力されたと聞いております。）又、インテリア業界を知るためにJIDに入会したと聞きましたが、ご自身は建築士会との関係もあって、JIDでの活動は特にする気持はないとも言っておられました。

大腸がんの手術を受けられた後も、一緒に仕事を行っており、元通り元気になられたと思っていた平成6年11月、桝谷会のメンバーで食事をしたのが、桝谷先生との最後となりました。亡くなられた今、大阪帝国ホテル、ホテル日航東京等、外国人インテリアデザイナーが活躍している状況の中で、実力を付けると同時に、桝谷先生のように先見性と実行力が必要であると非常に強く感じています。

平成8年1月13日没　享年66才。

ご冥福をお祈りいたします。

関東事業支部の動き

関東事業支部支部長　阪井　良種

筑波技術短期大学『高齢者、障害者にやさしい住まい』疑似体験とセミナーを開催して

JID関東事業支部国際（委）、教育・研究（委）、高齢化社会のインテリア研究会のジョイントイベントとして、3月2日～3日、1泊2日のセミナーが行われた。

第1日

- 高齢社会にむけての環境整備の歴史と課題
  萩田秋雄教授
- 加齢による見え方の変化と視界黄変化のシュミレーション
  吉田あこ教授

第2日

- 聴覚障害の聞こえの理解・解説・シュミレーションの方法
  大沼直紀教授
- 高齢社会にむけてのすまい・まちづくりのあり方
  萩田秋雄教授
- 片マヒ、高齢者、手動車いす、電動車いすを体験する
  萩田秋雄教授

初日の夜は、萩田教授、吉田教授を囲んで懇親会もなごやかに行われたました。8ヵ月にわたって用意されたセミナーでしたが、参加の方々の熱心さと、萩田教授の暖かいお人柄に包まれ、無事に終了しました。皆様にお書き頂いたアンケートは、いづれまとめて発表の機会が来ることと思います。

日常見ている「車椅子」の実体験

（高齢化社会のインテリア研究会　舟橋千枝）

中部事業支部の動き

中部事業支部支部長　安藤　清

「IFI '95 名古屋」の報告書が関係者の皆様のお手元に届き、ひと区切りの感を抱かれていることと思います。中部も昨年の結集を継続せんと、年明け早々、活性化のアンケートを実施し、3月末までに6回の会合を開催いたしました。平成8年度の役員選挙、支部機関紙「NOW」の発行を終え、今期の大きな課題の1つに、若い方々の参加を求めることを検討しております。昨年の見事なIFIの学生部会の動きを見ましても、やはり若いパワーを導入しなくては会の発展も望めなく、皆さん生涯現役たらんと、若い方と一緒に勉強をと燃えております。

私事で恐縮ですが、企業勤務30年休暇を利用し、イタリアのプチホテルを2週間程泊って来ました。ご当地の業界も厳しく、リニューアル等そうそうある訳でなく、B＆Bイタリアのコントラクト部門等では船の内装に活況を見いだしていました。こちらの建築事情も限られ、リニューアル等を仕掛けてはいますが、ビジネスチャンスは待っているのではなく、やはり仕掛けねばと思いを新たにしました。イタリアの地方都市でも、随所で日本の方のヘルプを受け、多くの方々の活躍を見るにつけ、日本人の国際化は確実に進んでいるのを見せて頂けた旅行でした。

我々デザイナーは、もっともっと世界に眼を向け、昨年のIFI '95の基調講演多田道太郎先生の「不易流行」の言葉を真摯に受けとめ、古いもの（日本古来のよいもの、こと）新しいもの（流行＝変わっていくもの、こと）を、バランスよく創り上げる努力をしながら、日本の生活環境の向上に努めたく思います。

前記のように、中部事業支部会員全員少数精鋭？で燃えております。来期もよろしくご友好を賜りますよう一同よろしくお願いいたします。

大渕澄夫建築素描展

「Befor 1945」

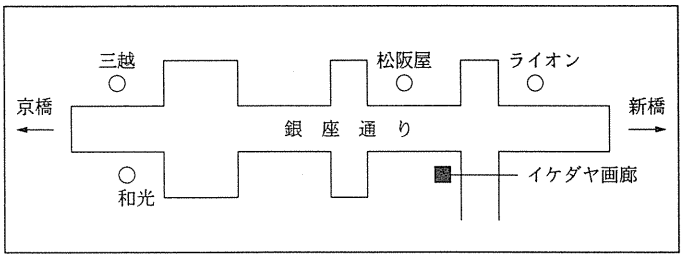
東京・横浜・群馬の建物を描く

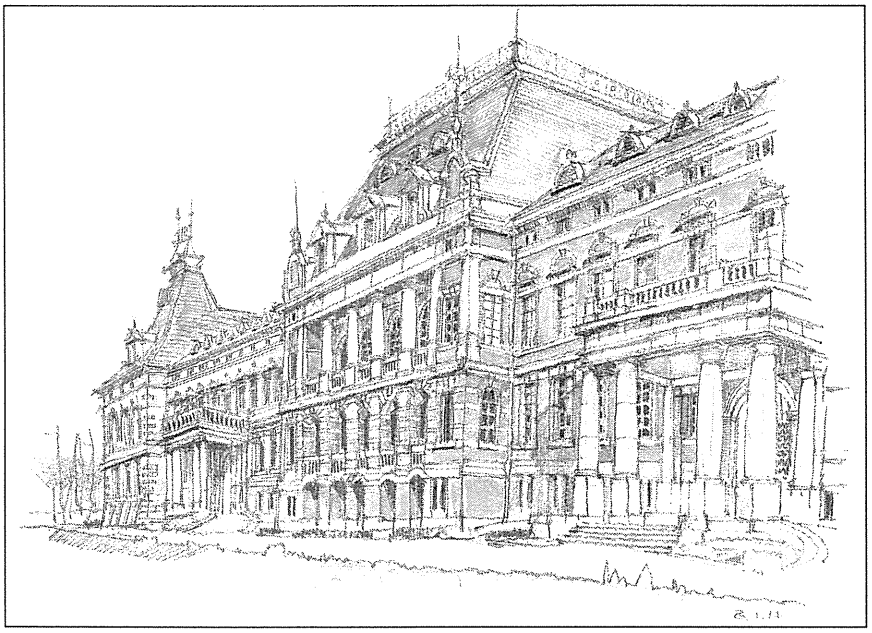
日　　時：平成8年6月3日（月）～6月8日（土）
午後11時～午後7時（最終日は午後5時）

場　　所：銀座イケダヤ画廊
〒104 中央区銀座6-9-12房野ビル1F
TEL 03-3571-6013

アトリエ　久喜市古久喜845-1-3-705

連 絡 先　〒113 東京都文京区湯島2-14-4
中村ビル2F
入須川高原開発株式会社
TEL 03-5688-0091
FAX 03-5688-0078





●関東事業支部会員／大渕澄夫さんの素描展です。
ぜひ、ご覧ください。
（本部事務局）

予 告

今年も「第28回通常総会」及び「第3回関東事業支部総会」が、同日開催となります。

また、この機会に「IFI '95 名古屋」のビデオなどを見ながら、「懇親パーティー」を計画中ですのでご予定下さい。

●日時／平成8年5月31日（金）午後～夜

●場所／新宿パークタワー8F

セミナールーム、クラブスクェア

（本部事務局）

「お詫びと訂正」

去る2月29日に「平成8～9年度役員選挙開票結果報告」をお届いたしましたが、校正ミスにより誤りがありました。お詫びすると共に、以下のように訂正させて頂きます。

3.　開票結果（得票順）●印は確定者

B－1監事（関東）

誤●渡辺　優（17票）

次点　三輪正弘（13票）●川上信二（8票）

B－1監事（関東）

正　渡辺　優（17票）

次点　三輪正弘（13票）●川上信二（8票）

（本部事務局）

関西事業支部の動き

関西事業支部支部長　千田　要宗

本年度の最大のイベント、「IFI '95 名古屋」も成功裏に終え、3月末をもってIFI運営会事務局も大任を果たし解散いたしました。そして、全力を上げて参加してきたJIDにとっては、次なる求心力を必要としています。

JIDが生まれてまもなく40年、インテリア産業を取り巻く環境は大きく成長し、それと共に私達インテリアデザイナーに求められるビジネス領域も拡大すると共に、専門化して参りました。このことは、同時にインテリアデザインの可能性を遠心的に拡大してきているといってよいでしょう。

JID関西事業支部は、かねてより教育・研究委員会と広報委員会を中心に、インテリアデザイナーの職能領域を明らかにすると共に、インテリアデザインの可能性を広く啓蒙するためのプログラムを検討してきました。

その結果、'96年度に向けての、JID関西の活動方針として、「インテリアデザインをどうとらまえるか」と言うテーマを機軸として、各委員会が活動してゆくこととしました。教育・研究委では、このテーマに基いたパネルディスカッションを年間4回程度開催する予定で、その第1回を3月7日に行いました。

第1回は、ファブリックデザインをテーマに賛助会員企業各位のご協力も頂き、大阪ガスインテリアスクールにて行いました。パネラーは、川島織物の笠原紀公子氏、住之江織物の高野亜希氏、サンゲツの深和直之氏、トーソーの渡辺文夫氏で、JIDの安藤真吾氏のコーディネートにより、ファブリックデザインの今後のあり方と問題点等、かなり現場的な発言も多く、第1回としては面白い内容になり、1時間も予定をオーバーした上、懇親会でも楽しい論議が続き、参加者は31名でした。

もう1つの動きとして、より開かれた活動的な組織作りを目指して、委員会活動への全員参加体制をとることを、約2年に亘り組織委員会、総務委員会にて検討して参りましたが、3月にJID関西の会員の皆様に、委員会への所属希望のアンケートを行い、'96年度より、全員参加による、活動的で新しい体制を目差します。JIDの活動は、参加することによって得られる「人」「事」が多く、今回の委員会全員参加は、関西会員の皆様と、JIDの結びつきをより強いものに出来ると考えています。

九州事業支部の動き

九州事業支部支部長　鐘ケ江　茂則

「なんでこんな時期に、どうして福岡に」といった質問ばかりの中、福岡は大きく変わろうとしている。九州の福岡が、アジア的注目度を集める巨大磁場として浮上してきたのである。

ビジネス、ショッピングからハイセンス感覚と装置を持った新たな都市が出来ている。なぜならば、アジアに遅れないという意識がどこかに生れてきたのではないかと思われる、特に都市政策面では、非常に大きいようである。

その中で今年は「APSDA '96」会議が福岡で開催され、また、新たなる試みとして「福岡デザインフェスティバル」を市の呼びかけで準備している。九州デザイン協議会が主催する「第2回九州デザインコンペティション」と「JID支部会員の作品展」と'96年度も大変忙しくなりそうだ。これからの進め方であるが、これらを同時期に集中して開催すれば、アジア、九州、福岡そしてJIDとそのイベント効果は拡大されていくものと思っている。先日、福岡市の呼びかけで市を中心としたデザイン16団体が一同に集まったが、始めての顔見せで団体の紹介だけで数時間を費した。これだけの団体があったのかと驚きの一語であった（この団体が福岡デザインフェスティバルの運営を行っていくことなりそう）

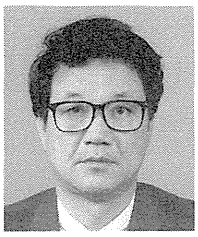
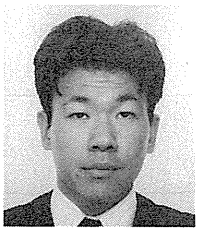
九州事業支部は、'96年度より支部組織が刷新される。パワフルそして今まで無かったなまめかしさをも含んだ支部になりそうで、楽しみにしている。新しい九州で新しいスタッフによる九州デザインマインドを歌いあげていきたい。

最後に私語にて申し訳ないが、支部長を2期勤めさせて頂き、誠に有り難く九州事業支部を始め各支部の皆様との交流とご指導を頂き、ただただ感謝、ありがとうございました。

〔 新 入 会 員 の 紹 介 〕

●新しく会員になられた方々です。新しい仲間としてよろしくお願いいたします。

●正会員

会員名及び番号		住 所 及び 電 話
東島尚賢（ひがしじましょうけん） 会員番号 1118 	〈勤務先・事務所〉 〈自　　宅〉 〈推　薦　者〉	株式会社　東馬 佐賀県佐賀郡諸富町大字為重 661 - 1　〒840 - 21 TEL 0952 - 47 - 2455 FAX 0952 - 47 - 5520 佐賀県佐賀郡諸富町大字諸富津 173 - 9　〒840 - 21 TEL 0952 - 47 - 4775 高瀬　守博・石松　軍人
佐名川威志（さながわつよし） 会員番号 1119 	〈勤務先・事務所〉 〈自　　宅〉 〈推　薦　者〉	The SESSION（セッション） 東京都新宿区築地町 10 番地 神楽坂ココハイツ 302　〒162 TEL 03 - 3267 - 3085 FAX 03 - 3267 - 3085 東京都新宿区築地町 10 番地 神楽坂ココハイツ 302　〒162 TEL・FAX 03 - 3267 - 3085 福田　友美・森谷　延周
加藤淳子（かとうじゅんこ） 会員番号 1120 	〈勤務先・事務所〉 〈自　　宅〉 〈推　薦　者〉	成安造形短期大学 京都府長岡京市調子 1 丁目　〒617 TEL 075 - 953 - 1111 京都府京都市北区西賀茂南今原町 111　〒603 TEL・FAX 075 - 493 - 0884 坪井　源・平井　義浩
虎屋正（とらやただし） 会員番号 1121 	〈勤務先・事務所〉 〈自　　宅〉 〈推　薦　者〉	鹿島建設㈱　設計・エンジニアリング総事業本部 東京都港区赤坂 6 - 5 - 30 KI ビル　〒107 TEL 03 - 5561 - 2480 FAX 03 - 5561 - 2489 東京都世田谷区桜 3 - 2 - 1　〒156 TEL・FAX 03 - 3428 - 1393 岩倉　榮利・李　泰久
宮本茂紀（みやもとしげき） 会員番号 1122 	〈勤務先・事務所〉 〈自　　宅〉 〈推　薦　者〉	㈱ミネルバ 東京都品川区平塚 1 - 10 - 7　〒142 TEL 03 - 3785 - 2337 FAX 03 - 3788 - 1431 東京都品川区平塚 1 - 10 - 8　〒142 TEL 03 - 3787 - 1668 浅野　盛治・今崎　務

● 賛助会員

会　員　名		住　所　・　電　話　及び　担当者
IDC株式会社 会員番号3156	住　　所 担　当　者 紹　介　者	東京都港区南青山5-4-30　〒107 TEL 03-5467-4329 FAX 03-5467-4329 所長　梅沢　信一 阪井　良種

会　員　の　異　動

● ご面倒でも1995〜1996年版「会員名簿」の該当ページを開けて、ご訂正下さい。

● 正会員

会　員　名	異　動　事　項	新
秋　山　修　治 （関東　P45）	勤務先名称	松坂サービス株式会社
飯　嶋　房　樹 （関東　P48）	事務所移転	東京都三鷹市上連雀1-7-24　〒181 TEL 0422-56-1151　FAX 0422-56-1152
内　田　次　彦 （関東　P57）	事務先削除	
大　淵　澄　夫 （関東）	事務所開設	大淵デザイン事務所 埼玉県久喜市古久喜845-1-3-705　〒346 TEL 0480-21-8456
大　森　清次郎 （関東　P63）	自宅移転	東京都世田谷区松原6-20-22　〒156 TEL・FAX 03-3321-4235
岡　部　史　子 （関東　P63）	自宅・事務所 移転	東京都渋谷区上原1-36-15-405　〒151 TEL 03-3466-2026　FAX 03-3466-2027
小笠原　紀　男 （関東　P64）	電話番号	0557-67-1678
阪　井　良　種 （関東　P81）	社名変更	㈲クニケンデザイン
菅　野　和　弘 （関東　P88）	自宅移転	東京都中央区箱崎町26-1-1003　〒103 TEL 03-3661-0612
菅　原　孝　則 （関東　P88）	事務所移転	東京都大田区田園調布2-8-13 ハイツ・エム・ケイ・ワン201号　〒145 TEL・FAX 03-3722-5107 分室 東京都大田区田園調布2-48-9 田園ハイツ23号　〒145 TEL 03-3722-5078
高　島　幸　一 （関東　P94）	自宅移転	東京都三鷹市中原1-23-30　〒181 TEL 03-3308-4423

会員名	異動事項	新
高田公平 （関東　P95）	事務所移転	㈱エッセンス 東京都渋谷区鉢山町15-2　ラ・メゾン・デピス3F　〒150 TEL 03-3780-9558　FAX 03-3780-9535
中島龍興 （関東　P106）	事務所移転	東京都中野区中央1-20-15-101　〒162 TEL 03-3366-4133　FAX 03-3366-4132
野田道隆 （関東　P113）	自宅移転	埼玉県浦和市根岸5-12-5　コスモ浦和根岸弐番館101号　〒322 TEL・FAX 048-863-4141
萩原多恵子 （関東　P113）	事務所開設	萩原多恵子デザイン事務所 東京都渋谷区渋谷1-1-6 エムエフ青山301　〒150 TEL 03-3797-3242　FAX 03-3797-3243
福田友美 （関東　P118）	自宅移転	神奈川県横浜市青葉区若草台2-7　〒227 TEL 045-962-7556　FAX 045-962-7535（横浜スタジオ兼）
小川千賀子 （関東）	自宅・勤務先 支部移転関東 ⇨関西	自　宅：兵庫県神戸市東灘区御影山手3-1-8-302　〒658 TEL・FAX 078-841-3905 勤務先：㈱コスモスライフ 大阪府大阪市淀川区西中島5-14-22 リクルート新大阪ビル10F　〒532 TEL 06-306-3833　FAX 06-306-3841
中山照雄 （関西　P178）	事務所移転	大阪府大阪市城東区鴨野西2-5-5-30　〒536 TEL 06-968-0541　FAX 06-968-0542
袴田穣一 （関西　P179）	勤務先	フリー
古川友貫 （関西　P182）	自宅移転	大阪府豊中市上新田1-24 G-509　〒565
宇治昌子 （九州　P193）	自宅・事務所 支部移転九州 ⇨関東	東京都世田谷区等々力3-22-15　〒158 TEL 03-3702-3127

※訂正 1995/1996 12・1号で、まなべみどり会員の事務所移転のビル名に間違いがありました。お詫びして訂正させて頂きます。正：大進ビル ⇦ 誤：大建ビル

●賛助会員

会員名	異動事項	新
アスワン （賛助　P204）	担当者	社長室 福岡　真貴子
㈱イトーキ （賛助　P204）	担当部署名 担当者住所	デザイン開発室 室長　鈴木　泰尚 東京都中央区入船3-2-10 アーバンネット入船ビル5F　〒104 TEL 03-3566-5511　FAX 03-3551-3277
㈱INAX （賛助　P205）	担当部署名 担当者	環境美研究所 空間デザイン・要素開発室 室長　加藤　純

会　員　名	異　動　事　項	新
㈱岡村製作所 （賛助　P 206）	担当者	佐藤　政満
㈱ギャラリー仲摩 （賛助　P 208）	担当者	山崎　圭子
㈱竹中工務店東京支店 （賛助　P 213）	担当者	設計部 副部長（意匠担当） 東　秀男
フランスベット㈱ （賛助　P 222）	担当部署名	生産本部 商品開発部
㈱三越 （賛助　P 225）	担当者	石岡　秀明
㈱リバコトレーディング （賛助　P 226）	担当者	代表取締役社長　小川　悟

ウィルクハーンジャパン株式会社
（会員番号3148）

〒106 東京都港区六本木5-17-1 AXISビル 2F
☎03-5573-2411 FAX 03-5573-2413
営業部　小野寺俊英

学校法人　大阪デザイナー専門学校
（会員番号3020）

〒530 大阪市北区堂島2丁目3-20
☎06-348-0558 FAX 06-345-1259
学務部部長　地蔵利昭

株式会社　内田洋行
（会員番号3018）

〒135 東京都江東区潮見2-9-15
☎03-5634-6248 FAX 03-5634-6835
所長　堤　幸男　企画課　白須公子

株式会社　岡村製作所
（会員番号3021）

〒100 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル
☎03-3593-5653 FAX 03-3593-5646
製品デザイン部　佐藤政満

1996/3～4

1996年4月30日発行　　社団法人 日本インテリアデザイナー協会月報（1996年通巻191号）

編集／発行・社団法人 日本インテリアデザイナー協会事務局　印刷所・有限会社　コーエイ企画
〒160 東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー8F
TEL 03-5322-6560　　FAX 03-5322-6559